

NEWSLETTER of
the Japanese Society for Applied Animal Behaviour No.9
September 2007

ISAE Council Meeting (2007 Merida)報告

会長 近藤誠司(北海道大学北方圏フィールド科学センター)



2007年7月30日から8月4日まで、メキシコ合衆国のユカタン半島先端の町メリダで第41回国際応用行動学会議 (ISAE2007 Merida、以下 ISAE 学会) が開催された。ISAE 学会開催に先立ち、恒例により ISAE Council Meeting (理事会) が、会場の Hotel Fiesta Americana の Sala de Consejo で開催された。近藤は東アジア地区理事 (Regional Secretary) として、この会議に参加した。なお昨年と同様、参加には応用動物行動学会が管理する基金の補助を受けている。また同基金から東北大学博士研究員の二宮会員が補助を受けた。

さて、会議は当日午前 10 時にゴージャスな Hotel Fiesta Americana の 2 階、レジスタレーションデスクのさらに奥まった一室で行われた。途中で昼食をかねた休憩を挟み、夕方 18 時過ぎまで続いた。毎回のことであるが、この理事会はやたらに時間がかかる。しかし、今回はメリダ市内のメリダ大学 Old University Building で Dr. Aline S. De Aluja の名誉会員推戴 (これもこの理事会で提案され議決された) と特別レクチャー、さらにその後のウエルカムレセプションが 1830 に予定されホテル発のバスが 1800 に出ることもあり、何とか時間内に会議は終了した。

当日理事会の出席者は会長の Marek Spinka 氏はじめ、各役員、地区理事など 13 名で、会議は Spinka 会長の開会の挨拶に引き続き、出席者の確認と欠席者のお詫びがあり、ついで前回のメール会議 Web-meeting (2006 年 11 月および 2007 年 3 月) の議事録が確認された。これらに加えて、全部で 18 項目の議題が用意されていたが、内容をかいつまんで紹介する。

ISAE2007 Merida 学会のこの時点での状況が、大会委員長で ISAE 中南米地区理事でもある Francisco Galindo 氏から報告された。全参加者 241 人、36 カ国で、昨年の Bristol 学会の参加者 381 名の 6 割程度の参加者数規模であったが、国別では逆に 1.3 倍ほどに大きくなっている。また Bristol 学会では英国からの参加者が地元が最大であった (105 名) が、この学会では米国が 47 名で最大であり、ついでメキシコ本国の 40 名であった。Applied Ethology の分野の研究者数が反映されたものであろう。なお、それ以外では英国が 26 名、カナダが 19 名で、日本はスペインと同数の 10 名、5 番目の参加者数国であった。やはりメキシコでの ISAE だけあって、ブラジル、バハマ、チリ、コスタリカ、キューバ、ウルグアイ、など 1~2 名ではあるが中南米諸国からの参加者がめだつた。またガーナから 1 名、ナイジェリアから 2 名とアフリカからの参加者もあった。経理関係の報告によると、支出総額はこの時点で 120,961.46US ドル、収入は 129,796.18US ドルとなっている。ISAE Merida 実行委員会は ISAE 本学会からおよそ 5,000US ドルを借り入れているので、最終的な収支決算は 3,756.30US ドルの赤字に

なるとのことであった。

Senior Vice-President の Ruth Newberry 女史から主に今後の ISAE 学会について 2008 年の第 42 回は Dublin (Ireland) で 8 月 5 日～9 日、第 43 回 (2009 年) は Australia の Cairns で 7 月 6 日から 10 日、第 44 回 (2010 年日程未定) は Sweden の Uppsala で開催されることが報告された。第 45 回 (2011 年) についてはまだ何も決まっていな
いが、1 年おきにできればヨーロッパ以外でやりたいとの希望が述べられ、例えばア
フリカのモロッコはどうか? という意見も出された。

Junior Vice-President の Janice Swanson 女史からは各地域の理事からの報告や
地域理事の現況、各地区のウェブサイトが紹介された。我が国の地域報告は近藤に
よって出されているが、ウェブは日本語版でこれは初回されなかった。いたしかたな
いでしょう。

Editor s Report では Vicky Sandilands 女史から全体の報告があったほか、このと
きだけ ISAE の認定学術雑誌である Applied Animal Behaviour Science (以下 AABS) の
編集部から Wim Meester 氏が出席し、出版状況など報告した。2005 年から 2006 年
にかけて投稿論文数は 278～348 に増加し、2007 年は 6 月までの総計で 176 編と 2006
年と同程度になりそうとのこと。また投稿者の国別割合は西ヨーロッパが 45% と最大
で、ついで米国・カナダが 19%、アジアが 12% を占める。このアジアは日本がもっとも
多いのではないだろうか。気になる Reject 率は 47～52% (2005～2007 年) であった。
AABS は Agriculture, Dairy and Animal Science の ISI category における Impact Factor
は 1.177 で第 12 番目であった。ちなみに第 1 位は J Dairy Sci で IF は 2.284 であった。

Membership secretary の Moira Harris 女史、Treasurer の Debbie Goodwin 女史、
Communication Officer の Derek Haley 氏は欠席だったが、会議室の PC に Internet
電話をつないで音声のみの会議参加および報告となった。まあ、こういうことができる
ならわざわざ集まる必要はないな、とも思ったが、こうした Communication が盛んにな
るが故に実際に集まって目と目を見ながら論議することが必要なのかもしれない。

任期終了に伴い、理事の何人かが交代した。会長だった Marek Spinka 氏は Senior
Vice President になり、これまでこの職にあった Senior Vice-President の Ruth
Newberry 女史は退任、また会長にはそれまで Junior Vice-President であった Janice
Swanson 女史があがった。ここまでは自動的な交代である。空席となった Junior
Vice-President にはそれまで Senior Editor であった Vicky Sandilands 女史が選ばれ
た。また Senior Editor には Joe Gamer 氏が、Assistant Secretary には Bas
Rodenburg 氏が選ばれた。その他の継続理事については ISAE の HP の ISAE Council
Member を参照されたい。

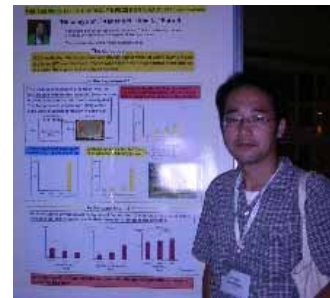
会議の最後に日本でもおなじみの Mike Appleby 氏が World Society for the
Protection of Animals (WSPA) の代表として出席し、Possibilities for collaboration
between ISAE and WSPA in the developing countries initiative および The
willingness of ISAE to support the Universal Declaration on Animal Welfare というプレ
ゼンテーションをおこなった。前会長の佐藤氏と私は、「運動体である WSPA と研究者
の会議である ISAE は本質的に異なるものだろう、また EU の動向や OIE のガイドラ
インが経済戦争という一面を持っている以上、さらに文化的風土の違いを考えると、単
純に developing countries initiative でコラボすることは好ましくないだろう」と考えてい
る。この会議では、米国の Joe Gamer 氏が運動体としての WSPA の問題点を鋭く突き、
結果的にこの理事会では何も決定しなかった。なお、ISAE Merida2007 が終わった後

の8月下旬に、Mike Appleby 氏の提案を受けて Marek Spinka 氏が2008年10月にエジプトのカイロで workshop として「Satellite to the OIE Global Conference on Animal Welfare」開催を提案した。これに関するメール会議の様子は一部応用動物行動学会役員にメールで配信したが、アジア地区理事としては上記のようなコメントを書き、コラボには賛成できない旨伝えた。結果的にワークショップを共同で開催するというところに落ち着いたかたちとなった。

最後に次回の会議は今年11月5日から予定されている Web-meeting で行われることを了承し、会議は終了した。

第41回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告

二宮 茂(東北大学大学院農学研究科・研究支援者)



第41回国際応用動物行動学会はメキシコのメリダにて開催された。2007年7月30日から8月3日までの5日間(30日は登録とオープニングセレモニーだけだったので、実質4日間)、特別講演2題、プレナリー6題、口頭発表93題、ポスター発表124題が行われた。そのうち9題が私も含め日本からの参加者による発表であった。学会会場は the Fiesta Americana-Hotel という、日本でもなかなか入ることのできない建物の中が吹き抜けとなっているとても立派で綺麗なホテルであった。

口頭発表の各セクションの見出しから今回、発表された演題の方向性が分かると思ひ、次にあげた。認知、情動と動物福祉(7題)・行動と保全(3題)・環境エンリッチメント(8題)・痛み(4題)・粗放的システム(6題)・羽喰い(4題)・ウマの福祉(2題)・行動と生産性に関連した疾病(11題)・繁殖雌豚の休息行動(3題)・臨床行動学研究(8題)・ストレスと行動(4題)・子牛の福祉(4題)・社会行動(5題)・反芻動物の福祉(5題)・ニワトリの福祉(4題)・温度環境と行動(4題)・方法論の評価(6題)・自由演題(6題)であった(プログラム順)。このように動物福祉に関連する演題が多かった。ISAEに参加するのはこれで2回目であったが、前回の日本開催では運営のアルバイトも兼ねていたので、今回は余裕をもって発表を拝聴することができた。口頭発表は2会場で平行して行われたので、全ての発表を聞くことができたわけではないが、玉石混交という感じで、興味深い発表は多かったが、逆に質問もしたくなるような発表もあった。以前のニュースレターでも報告があったように発表演題の質の向上が必要ではないかと感じた。

多くの発表の中でも Mike T Mendl 博士のグループが発表した研究はとても興味深かった。そこでは動物の情動に関する主観体験に焦点をあて、巧妙な実験計画により間接的にその存在を示唆し、それは行動の発現にも影響を与えることを示した。彼のプレナリーも含め、その発表を聞いたことは私の今回の収穫となった。また、別の演者の発表ではヒトが騎乗した状態でウマの調教時の走法に対する選択性を調査したのがあり、その発想は面白かった。

私自身はニホンジカにおけるオオカミの糞の嫌悪効果というポスター発表を行った。

今回の学会ではポスターセッションは口頭発表の間に設けられたお茶休憩と同時に
行われ、合計7回もあった。お茶休憩時に行われるので人口密度が多く、また、私の
ポスターの前は人の移動経路上にあったのでとても忙しい感じであった。そのせいか、
質問をされる機会は少なかったが、フェロモンと行動を研究している人からいろいろと
実験について質問を受けた。国際学会だけに他の国でも自身の発表と関連する研究
を行う人もいるのだと改めて感じた。

メキシコには7月28日に入国した都合、学会開催前に現地の農家を見学しようと
考え、大会運営委員長の Galindo 博士に問い合わせ、地元ユカタン大学の先生であ
る Ku Vera 博士を紹介して頂いた。29日にはチシミンという都市にあるウシの放牧を
行っている農家を案内して頂くこととなり、Ku Vera 博士と現地で待ち合わせするとい
う約束を学会へ出発する前にE-mailでやりとりした。しかし、当日、カンクンという都市
からバスで2時間半かけてその待ち合わせ場所へ1人で行ったが、彼と会うことがで
きなかった。日本からメキシコへ最後に送ったE-mailが届いていなかったようだった。
そこで、なんとか売店のやさしいおばちゃんや兄ちゃんに電話のかけ方を教わり(英語
は通じなかったのでジェスチャーで状況説明をし、理解してもらった)、ようやく Ku
Vera 博士と連絡が取れた。結局、チシミンからまた、バスに2時間乗って、メリダで博
士と会うことができた。次の日、Ku Vera 博士に現地のヒツジ放牧農家や大学内の乳
牛の放牧の様子など案内して頂いた。メキシコの気候を考えると暑熱環境でいかに
動物を飼育するかが大変そうであった。その次の日も、Ku Vera 博士には、近藤誠司
会長を含め、佐藤先生と奥様、森田先生、多田君、島田君を加え、地元のレストラン
を案内してもらうなどなど、とてもお世話になった。

最後に、第41回国際応用動物行動学会 in Mexico に参加するにあたり、応用動物
行動学会の国際応用動物行動学会議派遣等基金から参加助成金を受けました。今
回の学会では貴重な講演を聴くことができたうえ、メキシコの文化なども肌で触れるこ
とができ、とてもいい経験をさせてもらいました。応用動物行動学会の皆様感謝い
たします。

第41回国際応用動物行動学会(ISAE)参加報告

多田慎吾(北海道大学大学院農学院・博士後期課程1年)



2007年7月30日～8月3日にメキシコのメリダで開催された第41
回国際応用動物行動学会に参加させていただいた。私にとって初め
での国際学会である。学会の概要やテーマなどについての解説は
先生方にお譲りするとして、ここでは主にこの学会に学生として参加して私が感じたこ
とを書こうと思う。

学会に参加してまず驚いたのは、この人達は国際学会に遊びに来ているのか？と
思うほど雰囲気がかジュアルであったことである。かジュアルすぎて雑談ばかりしてい
るのではと感じる部分もあったが、みながみな常にそういった態度で学会に参加して
いたのではなく、多くの参加者は和んだ空気の中で、発表者あるいは質問者として活
発に議論していた(と思う)。

私もポスターセッションで発表させてもらった。内容は放牧牛の移動経路に影響を及ぼす要因をフラクタル解析という手法を用いて検討するというものであった。人が来るとき、来ないときの波はあったが、かなり多くの人にポスターを見てもらい、質問してもらえたと思う。見てくれた人から”この研究面白いね”といったようなことを言われると、(決まり文句なのかかもしれないけれども)素直にうれしく、発表した甲斐があったと思えた。興味深かったのは、フラクタル解析についてよりも、どうやって移動経路をデータとしてとったのかという点に興味をもつ人が多かったことだ。これは何百枚もの写真からウシがいる場所の座標をおこすという地道な作業から得たデータであり、そう説明すると多くの人から”大変そうな仕事をやったね”と感心された。フィールド下でデータをとる苦労を知っていて、その点に関心をもつ研究者がこの学会には多く集まっていることのあらわれかとも感じた。

ポスターの製作に苦労した身にとっては、どんなポスターが優秀ポスター賞をとるのかといったところも大きな興味だった。しかし、ポスター賞の授賞発表はポスターの片付けがすでに終了している FAREWELL PARTY の時であり、結局、ポスター賞をとったポスターがどれか分からず、心残りであった。

私は自分のポスター発表でかなり手一杯であり、研究発表を聞く立場としての余裕はあまり持てなかったが、いくつか興味を引かれた発表があった。特に、F. Provenza 氏の plenary 発表は草食動物の採食行動に自然選択と学習がともに関連するといった問題を扱っており、この観点は私自身の研究内容に関しても問題になると考えたことがあったので興味深かった。さて、この学会の中で私の心に残った大きな出来事の一つは、この Provenza 氏と直接話す機会を得られたことである。私の指導教官である近藤誠司教授はご存知の方も多いと思われるが物怖じしない性格であり、Excursion で訪れたウシュマル遺跡で Provenza 氏を見かけると声をかけ、雑談を始めた。Provenza 氏の review paper の中で疑問に思うところがあった私はチャンスだと思い、その時質問させてもらったところ、Provenza 氏は優しく答えて下さった。結論は、その点はまだよく分からないということであったが、現時点で考えられる仮説を挙げて下さり、興味深く聞かせてもらった。

ポスター発表、口頭発表、また、それ以外の場での会話など、本学会には刺激的な機会が多くあったが、学会全体を通じて、日本人は英語圏(あるいは言語形態が英語に近い国々)からの参加者と対等な立場で学会に参加できているか疑問に思うことも少なからずあった。英語を用いなければならぬ不平等さを感じることもあったが、質問をするとき、質問を受けたとき、雑談するときに言いたいことをうまく伝えられないもどかしさ、また、そのために議論、会話に積極的になれない悔しさを感じることは多かった。つたない英語を喋っていても、多くの学会参加者は辛抱強く理解に努めてくれ、あるときはすすんで雑談に付き合ってくれ(同年代のメキシコ人学生、院生に多かった)、とてもありがたく、うれしかった。しかし、国際学会の場をより楽しむには、英語で話す力は必要であると感じた。

世界に自分の研究や考えを面白いと言ってくれる人がいることを実感し、それらを通じて多くの人と出会うことができたという経験は、国際学会に参加しなければ得られなかったものだと思う。その人達に自分の考えていることをより知ってもらうためにやるべきこと(論文を書くこと、英語を勉強すること)を考えさせられ、それに対するモチベ

ーションを高めてくれた本学会は、とても有益で楽しいものだった。参加できてよかったと思える。

**日本家畜管理学会・応用動物行動学会共催
2007年度 秋季現地検討会開催案内**

シンポジウム担当幹事 青山真人(宇都宮大)



9月26日-27日に岡山で開催される第108回日本畜産学会大会に伴い、秋季現地検討会「笠岡干拓地における自給飼料を活用した大規模畜産経営」が開催されます。これは日本家畜管理学会が中心となって企画した検討会ですが、応用動物行動学会との共催ですので、ここで案内致します。参加人数に限りがありますので、ご参加希望の方はお早めに申し込み下さいますよう、お願い致します。Eメール、FAX、葉書などでお申し込みください。バスの都合上、先着45名様までとさせていただきます。申し込まれた方には、後日、集合場所などのご案内をお送りいたします。

日時 平成19年9月28日(金)
場所 岡山県笠岡市笠岡干拓地
日程 11:50 岡山大学農学部集合
12:00 出発(バス)
13:30 - 16:00 現地見学(酪農家2戸、肉用牛農家2戸)
17:30 岡山大学到着・解散
参加費 2000円(昼食代含みます、当日お支払いください)

申込先・問合せ先
〒739-8528 東広島市鏡山1-4-4
広島大学大学院生物圏科学研究科
小櫃剛人
Tel & Fax: 082-424-7955
Email: tobitsu@hiroshima-u.ac.jp

世話人代表 広島大学大学院生物圏科学研究科 藤田正範

今日、飼料自給率の向上にむけた取り組みが全国的な規模で行われています。しかし、土地基盤の小さい本州では、土地利用型の大規模な酪農や肉牛生産に対して様々な課題を抱えています。岡山県の南西部、広島県に隣接する笠岡市には、全国有数規模を誇る笠岡干拓地があります。ここに、酪農12戸、肉用牛肥育4戸が営農しています。特に、酪農では、岡山県の中でも上位の経営規模を誇る土地利用型の大規模経営が実践されています。また、農業生産法人による飼料生産など、広大な圃場を活用した粗飼料の生産が行われ、全国草地畜産コンクールにも入賞を果たしています。

今回の現地研修会では、この笠岡干拓地における酪農家および肉牛農家の見学会を企画いたしました。自給粗飼料を利用した大規模経営の状況について視察していただき、今後の家畜生産の展望と課題について議論を深めていただきたいと思います。

動物の環境エンリッチメントに関するシンポジウム開催案内

シンポジウム担当幹事 青山真人(宇都宮大)

下記の要領で動物の環境エンリッチメントに関するシンポを行うことになりましたので、お知らせ致します。お誘い合わせの上、ご来聴下さいますよう、お願い致します。

記

「動物たちの QOL(生活の質)向上を考える
- 飼育動物における環境エンリッチメント -」

講演タイトルおよび講演者

* 飼育動物の科学的愛で方

佐藤 衆介 先生 (東北大学大学院)

* 家畜・家禽における環境エンリッチメント - 特に産卵鶏について -

新村 毅 先生 (麻布大学大学院)

* 伴侶動物における環境エンリッチメントについて

尾形 庭子 先生 (どうぶつ行動クリニック・FAU)

* 霊長類から見た展示動物における環境エンリッチメント

上野 吉一 先生 (東山動植物園)

* 環境エンリッチメントが脳に及ぼす影響について

上田 秀一 先生 (獨協医科大学)

日時:11月4日(日) 13:00-16:15

場所:麻布大学 8号館3階 8301 教室

学会年会費納入のお願い

会計担当幹事 出口善隆(岩手大)

年会費を未納の方は、年会費(2,000円)をお振り込み下さるようお願い申し上げます。本年度(2007年度)会費未納会員は78名、2006年度会費未納会員は10名となっております。本学会の収入は個人会費のみです。未納会費金額は、いまだ2007年度予算の個人会費収入金額の64%に相当いたします。このような状況が続けば、学会活動に支障が出ることも予想されます。本学会財政を健全



化するために、学会年会費のすみやかなお振り込みをお願いいたします。

お振り込み方法

「郵便振替口座」に、年会費をお振り込みください。

加入者名 応用動物行動学会

口座番号 02790-9-13298

なお、お手数ですが、お振込みには郵便局に備え付けの「郵便振替払込用紙」
(青色、振込人が振込料金を負担する用紙)をご利用ください。

過去の年会費振り込み状況がわからない場合は、

会計担当幹事: 出口善隆 (deguchi@iwate-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

編集後記

ISAE2007Merida からすでに1ヶ月半が経過してしまいました。

ニュースレターNo.9 はこれに関連した記事を中心にお届けさせていただきましたが、まず、配信が遅れたことをお詫び申し上げます。来週には日畜岡山大会が開催され、同時に今回案内がありましたように日本家畜管理学会共催 2007 年度秋季現地検討会も開催されます。次号では現地検討会に関連した報告を掲載させていただきます、10 月中旬には配信させていただく予定です。会員の皆様にはこれに

合わせ、御意見や掲載記事など、どしどしお送り下さいますよう、よろしく願い申し上げます。(ニュースレター担当 河合正人: kawaim@obihiro.ac.jp)

